

「海外のシェイクスピア事典から見た「日本のシェイクスピア」とは何か」（『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第16輯、武蔵野学院大学、令和5年3月）、1-13頁

「プロローグ」「1 『日本のシェイクスピア』とは」「2 海外の『日本のシェイクスピア』」「3 海外が注目する『日本のシェイクスピア』とは」「エピローグ」の順で論じた。海外のシェイクスピア事典15冊を調査し、そこで主に取り上げられているのは黒澤明監督のシェイクスピア映画、蜷川幸雄のシェイクスピア劇上演であった。特に、黒澤明のシェイクスピア映画への言及は目を見張るものがある。海外のシェイクスピア事典の調査でも明らかになったが、おおよそ海外が注目している「日本のシェイクスピア」とはパフォーマンスである。蜷川幸雄の活躍もあるが、それ以上に黒澤明監督の映画に関する注目度が異常に高いことがわかる。『蜘蛛巣城』（1957）をシェイクスピア映画研究として本格的に取り上げた嚆矢は Roger Manvell. *Shakespeare the Film* (1971) であった。今回の事典の調査は1957年以後のものを対象としたが、15の文献のうち、黒澤明を取り上げているのは13文献（01と10を除く）であった。蜷川幸雄については4文献が（08、09、14、15）が取り上げていた。このことは一体何を意味するのだろうか。その理由としては3つが考えられる。第1に上演が一過性（一期一会）であるのに対して映画は繰り返し視聴が可能であること。これは科学の発達産物である。第2に第1を踏まえて英語字幕などにより外国人も視聴が効果的に利用できるようになった。第3にシェイクスピア映画が次々と製作されるようになり、今やシェイクスピア映画研究がひとつのジャンルとなったことだ。『蜘蛛巣城』（1957）の印象はあまりにも鮮烈であったということだ。それ以降の黒澤明への注目度が高いことがわかる。これに対して日本の研究状況は1991年の国際シェイクスピア大会が東京で開催されて以降ようやく本格化することになったのだ。（B5）